理事投稿＝１＝

今月より、理事投稿をシリーズでお届けします！

◇　酒よ！･･･温泉＆酒蔵ツアー

私は日本酒が大好きです。

3 年前まで、定年になった元上司とともに毎年「温泉＆酒蔵ツアー」を楽しんでおりました。

車で出かけますが、帰りには 2 人で買ったお酒でトランクが一杯になるほどで、ツアーでのエピソードをご紹介します。ちなみに同行するこの上司の名前は母里（ボリ）さんといいます。

福岡から高速で山口へ。津和野に立ち寄り地酒を手に入れ宿泊予定地の匹見峡温泉へ。到着してまず驚いたのは、廃校となった分校が外観はそのままで内装だけ改造され立派な宿泊施設となり、昔運動会を行ったであろうグラウンドが駐車場となっていました。玄関・靴箱が並べられていたと思われる場所がフロントと売店となり、部屋は教室を間仕切りしての立派な洋室で、渡り廊下をはさんだ別棟には広々とした温泉があり、おいしい山の幸料理を夕食にいただきました。

翌朝、昨夜頂いたお酒を売店で買い求め出発。次の酒蔵・温泉を目指す途中、三段峡を見学し広島県へ入り、のどかな山あいの酒蔵をやっと探し出した時の出来事です。

事務のおばちゃんらしき方、一人で留守番をしておられました。「福岡から来たとばってん、ここのお薦めの酒ば分けてくれんですか」「社長が帰られまで待っててください」･･･10 分ほど待ちました。

「社長、福岡からお客さんが見えてます」

「社長、この酒蔵で一番おいしか酒ばわけてもらえんですか」

「うちは小売はしよらん。せっかく来てもらったけど売られん」

「そこば何とか分けてもらえんですか」

「売られんものは売られん」

このような会話をしていた時、黒田節で有名な槍と杯を持った博多人形が目に入り「すばらしか人形ですね」と褒めたところ「親友からのプレゼント」とのこと。「この人形のモデルはこの人のご先祖様（母里太平衛）なんですよ」ここから態度がガラっとかわり、「そーですか。こんなところで立ち話もなんですから」と社長室と書いてある小部屋に通されお茶をいただきながら世間話をし、消費税抜きでおいしいお酒を分けていただきました。（タダではなかった）

山口県と広島県の酒蔵を数件めぐりおいしいお酒を手に入れ、山あいの温泉にゆっくりつかるといった楽しい 3 泊 4 日の「大名旅行」でしたが、広島市内の酒蔵ではあるべき場所に酒蔵がなく、探し回った挙句尋ねると「火事で焼けてしまって、そこの空き地があった場所」なんともいえない気持ちでした。

また、佐賀県の酒蔵には先ほどとはまったく逆の酒蔵があり、

「うちの酒は市販しとらん。買いに来た人だけにしか売りよらん･･････」

「富士の雪」という銘柄だけを造っておられる田舎の普通の一軒屋。先代が上京の折、富士山の冠雪の美しさに感動し名づけたといわれる銘柄が「富士の雪」で、明治・大正時代にはこの地に炭鉱があり、需要に生産が追いつかなかったこともあったそうです。かつては有田の水を用い全国清酒品評会で優等賞を獲得するなど伝統のあるお酒ですが、今では玄関に小さく「富士の雪」の看板がかかっているだけでわからずに通り過ぎてしまうこと間違いなしです（10 本買って帰りました）

二人とも**「温泉とお酒が大好き」**です。人の出逢いには格好なものです。

しかし、私は**「アルコール依存症には注意」**しています。アルコールが無ければ何も言えない、何でもアルコールのせいにする等など、アルコール依存症は、身体はもとより精神をも蝕む怖い存在です。依存症とともに、当然**「飲酒運転は絶対にしない」**ことを誓っております。

【長迫　哲朗】

****

◇　空気･･･

流行語に「KY」という略語があったことは記憶に新しい。これは「空気読め」や「空気が読めない」という意味で使われていた。

山本七平は「『空気』の研究」のなかで、「*驚いたことに、『文藝春秋』昭和五十年八月号の『戦艦大和』でも、『全般の空気よりして、当時も今日も(大和の)特攻出撃は当然と思う』という発言が出てくる。この文章を読んでみると、大和の出撃を無謀とする人びとにはすべて、それを無謀と断ずるに至る細かいデータ、すなわち明確の根拠がある。だが一方、当然とする方の主張はそういったデータ乃至根拠は全くなく、その正当性の根拠は専ら『空気』なのである。最終的決定を下し、『そうせざるを得なくしている』力をもっているのは一に『空気』であって、それ以外にない。これは非常に興味深い事実である。*」と書いている。

確かに、歴史書を読んでいるとこのような場面に多く遭遇する。大和の出撃に限らず、日本軍の戦略策定は一定の原理や理論に基づくというよりは、多分に情緒や空気が支配する傾向にあったと思われる。その多くは、「必勝の信念」、「人情論」に帰結している。不確実性が大きい状況では、人々が個々に行動することは最悪の事態を引き起こす可能性があり、正解はどれだけ多くの人々がそれを正しいと思っているかに依存する。空気は、人々の行動を一つの解に同調する役割を果たしているといえる。

たとえば、1930 年代の大恐慌をもたらした原因は、金融システムの崩壊によって投資家のリスクを恐れる空気が、現金（流動性）に逃避したことにある。さらにサブプライム・ローンの問題は、資産担保証券(ABS)の評価は格づけ会社によって行なわれているが、彼らは評価する対象の発行企業から報酬を得ているので、甘く評価するバイアスが生じやすいという疑惑が内在していた。そういう疑惑がもともとあったところに、7 月の格下げで「やはり」という空気となり、パニックが他の証券にも広がったものである。

人は、不確実性に直面した場合、多数派同調傾向を示すことで、安心していられる不確実性の存在しない環境を生み出そうとすると考えられる。このことは、多数派同調傾向が安心を生み出すが、信頼を生み出す訳ではないことを意味している。むしろ逆に、特定の相手との間に相互拘束関係を維持することで、関係外部の人間に対する信頼が低下する傾向にある。多数派同調傾向は安心を生み出すが信頼を破壊する傾向にあると思われる。

山本七平は「『空気』の研究」のなかで、「*『やると言ったら必ずやるサ、やった以上はどこまでもやるサ』で玉砕するまでやる例も、また臨在感的把握の対象を絶えずとりかえ、その場その場の”空気”に支配されて、「時代の先取り」といって右へ左へと一目散につっぱしるのも、結局は同じく「言必信、行必果」的「小人」だということになるであろう。大人とはおそらく、対象を相対的に把握することによって、大局をつかんでこうならない人間のことであり、ものごとの解決は、対象の相対化によって、対象から自己を自由にすることだと、知っている人間のことであろう。*」と書いている。

ちなみに、論語に記されている第一の士は『行己有恥、使於四方不辱君命、可謂士矣』、『我が身の振る舞いに恥を知り、四方に使いに出て君の命令を損なわなければ、士だと言える。』である。

私が考えるに「空気」とは、共同体のうちで共有化された価値観、知識であり、共有化された価値観を持つ人間は、その共同体に属し同じ価値観をもつ者がほかにいるという精神的な後ろ盾があるため、少数派を攻撃することに躊躇しない。

「KY」という略語は、「個人の自由」を否定し、失わせていく構造が含まれていると考えられる。「空気が読めない」には善悪両面の価値が存在するが、それは人の「自由意志」が存在している何よりの証しとも言える。「空気を読む」ということは共有化された知識、価値観に身をゆだね、自ら考えることを停止してしまわないだろうか。